

御内室、それから文雄氏がまだ二十一才で大小をたはさみ、同氏の許嫁、同姉君、同弟貞雄、後の小栗氏は十才で、頭髪は紫の打紐で束ね、若衆作りに義経袴といつたいでたち、その他弟君と女中若党といふ大家族……(守畧)……横濱にはイギリスの赤隊が此していら頃として、港のあたりをうろついている兵隊が、矢野家一行を見て、第一に多門翁の錦の袋を見て、何だとはいふようすにいぶかるので、袋をとつて見せる……云々

この文の姉君とあるが、先生には姉君はなかつた。先生の兄弟は前記したように六人である。小栗又一着「龍溪天野文雄君伝」の巻頭を飾る写真の中に、「大正三年矢野邸内の桜花満開の下に先生の同胞六人集団せし」といふのがある。それを見ると、先生を頭にして、二弟武雄、三妹峯子、四弟貞雄(小栗)、五弟為雄、六弟道雄であることがわかる。(この項おわり、つづく)

探訪記録

佐伯 四 回 雲場探訪 四

山も川も人を祖人の夢の跡

会員 佐 脇 貫 一

相江の江國寺を訪れたのは旧年十二月のことだった。それから二か月あまり、この無信心の巡礼者はいたずらに日月の過ぎゆくのを悔むばかり、過路廻國の志など蕉翁翁の百分の一もなし。さりながら

雲場かやりの企画は捨てたわけではなく、寒天におびえ、雨氣を葉に
ながら、おが毎日待ち望んでいた。

二月十八日、もはや陰曆の通用しない御時世をれば、どの農村も旧正月の白い日はない。自轎車を駆って行くは下野田地込泥谷部落、江國寺下の県道を市谷に出で、農道を大泥谷に向かえば、市谷の山端に天神社があり、その隣に墓地群がある。ここには泥谷邑の名門勝田家の墓所、歴代の奥津城は名家のよすがを残している。明治五年に組織され、同六年から九年まで九州各地を巡業して名声を博したといふ堅田の地獄言(歌舞伎芝居)市谷座の座元勝田五郎の墓もあり、その先人で儒者であり、医家であった人の墓もある。

泥谷部落の奥まった山裾にある正明寺、石階さの尻れは山門に「九に十字」の紋章がとりつけてある。龍沢山正明寺、寛永元年日向佐土原領主たつたといふ内田少将正明の子淨龍が創建したといわれる真宗寺院である。この寺は元堅田川をへだてた泥谷の対岸佐土原に建てられはじめ佐土原寺と号していたが、後正明寺と改めた。大正元年秋の大洪水で堅田川が氾濫、このあたりは一分の石礫となった。流失した正明寺はその法燈を持續する友め泥谷に移り、現在地に建築したという。

十八番札所の西光庵はこの正明寺の地続き、隣接地にある無住の庵、かつて禪僧も住んでいたよう、その余情は残っているが、今は破れ果てて見る影もない。境内の墓域は正明寺と共同のものらしいが、空齋、安永年間の大乗妙典一石一宇塔也、これを建てた庄屋沙月安右衛門惟貞、同じく安左衛門範香などの刻名、また沙月伴蔵の建てた空笠印塔(残骸)の記年から推察すると、西光庵は少なくとも旧幕藩時代は浄土宗所屬の寺庵で、比較的近年(明治時代)江國寺末となったものと思われる。そ

礼は境内にある錫杖塔に、長松禪寺云々の文字があり、明治初期の排仏業釈以後に立直された寺庵のあり方を暗示してゐるからである。

西光庵墓地には元禄十四年建造の念仏碑があるが、これはこの庵へ寺であったかとも分らないの中興、法蓮社住持直向上人の建てたもので、その側にある性善の墓には空信大和尚と刻んであり、この人が地域的に名のあつた僧であることと証明してゐる。

西光庵の本尊仏は薬師如来といふことになつてゐるが仏壇に坐すお姿は釈迦如来のようである。本尊ほどにかく脇侍の仏像は首がもげ、体はばらばら寄木細工のはかまさをさかしてゐるが、右側に納めてある大小さまざまの位牌は雅然として人の注意をひかないが、手にとつて見ると『東照大権現、台徳院殿、大猷院殿神位』と彫記されてゐる。東照大権現は言うまでもなく徳川家康であり、台徳院殿は秀忠、大猷院殿は家光である。往昔の状はわからぬが、現在無住の小庵である西光庵は、どうして徳川將軍家の位牌があるかだろ。この泥谷地域が旧藩時代の天領(幕府領)であつたためか、若しそうであれば、江戸寺さほじか福蔵寺、常楽寺、延命庵などにも同様な位牌があり、祀りが行われていなければならぬ。

正明寺は真宗で、直接的には西光庵の歴史に關係はないが、開基淨覺の父は内少将正明といひ日向佐土原領主と伝えられてゐる。淨覺が佐土原寺(正明寺)を創建したのは寛永元年と伝えるから、多少年令の幅を考へて正明は永祿元年(天正の頃の)の人であつたと見てよい。寺記には永祿年間薩州の乱を避けてとあるが、年代的には不自然である。ヤメその時代の日向佐土原の城主といへば、天文二十年(一五五一年)から天正五年(一五七七年)まで伊東三位入道義統の居城であり、その十二月島津氏に敗れた義統は佐土原城を去つて豊後で亡命した。伊東氏に代つて佐土原城主となつたのは島津中務少輔家久、天正十四年十一月佐伯地方に侵入した日隆軍の総大将である。天正末年から慶長にかけては家久の子豊

久が佐土原城主であつた。こうした史実からいへば内田正明の佐土原領主及び軍を伝承といふことにはなる。なお内田氏についてであるが、上野田地区中山の内田氏は、日向縣城主高橋左近大夫の家臣で、高橋氏改易後(慶長年間)佐伯に來たといわれ、家紋は四九に十字を使つてゐる。正明寺の紋章と同様であるので一け加えておく。

西光庵を辞した私は堅田街道を南下、波越に向つた。十ヶ番札所東輝庵は地下の北方、ちよつと大樹立にかまされ無住の庵である。兩戸は堅く閉ざされて、訪う人もないたをすまい。戸の隙間に通路同行の納札が数枚はさまれてゐた。境内に付近農家のものらしい洗濯物が寒風にはためいてゐる。境内墓地には古い五輪塔が二基、日かた五輪の空輪が三つ軋がつておひ、文政十年と刻んだ禪中塔と同じころのものらしい地藏尊像がある。数年前この庵を訪れたとき、草叢の中に六地藏塔(石幢)の望亭があつたが、いまは見当らない。

東輝庵から約五百米ばかり北東の山裾には、波越焼の窯跡がある。佐伯藩祖毛利高政の朝鮮からつれて來たといふ陶工は陶磁を焼かした跡を伝へられてゐる。

東輝庵から村中へ道を本地下に入ると、氏神天満社にいたる路傍の畑中に一基の五輪塔がある。かなり古いものだ。その横に幸の神の祠があるのを見ると、庚申信仰に關連して祀られたものらしい。『佐伯霊場道しるべ』によると、昔はこの右左から杉林になり振割に續いたといふ。二十ヶ番札所常楽寺はこの杉林の西端、振割に面した若杉茂る丘上にある。仏徳山常楽寺、これは古い寺である。境内にある永永二年(一三九五)の古塔、本堂(観音堂)扉口に懸けられた文安四年(一四四七年)在銘の鰐口は私たちが祖先の遺物、佐伯地方の文化数として知られてゐる。常楽寺の南西、波越山塊の麓に我淨寺の跡がある。金剛山我淨寺は堅田郷ではもつとも古い寺だつたが、天正十四年の兵亂に焼亡したと伝えられ、その法燈

は江國寺と常樂寺に分けられたという。

常樂寺はもと現在地の南方台地におつたようである。我淨寺におとらぬ歴史と伽藍を誇つていたが、時代の交遷は寺觀を廢退させ、近世に入つては觀音堂を中心にした江國寺末の小寺になつた。大永七年秋、榊牟礼城を落去した佐伯惟治は、身をおく土地を訊ねて堅田路を辿つたが、一夜の宿をこの常樂寺に求めた。堅田大神氏を檀越とする常樂寺は、住持を日じめ全僧が出て、惟治一行を厚くもてなした。そのとき惟治は「大神一族の帯依するこの寺は、身にとつても縁故の寺、落ち行く運命とはいへ、身も榊牟礼の惟治じや。武運があらばまた他日参向することもある。御住持よ、大悲の仏の御前に身の前途を祈つてくれ」と着ていた陣打織を贈つて祈符を振んだ。この伝説の陣打織は、戦時中武運の守りとして切りとられ、断片となつて同時に保存されていたが、先年無住となつたをめぐり、これらの寺堂がどうなつたか、いまは知る術もない。常樂寺の本尊は千手觀世音で、これは西國三十三番の、十番觀音靈場の主仏。佐伯四郎八十八ヶ所二十番札所は境内の地藏菩薩と本尊とする。

常樂寺を後に堅田中學校前に出ると、道側の山際に庚申塔群がある。その中に宝篋印塔の残骸と思われる塔身は「三界万靈、月心妙香祥尼、大永六丙申年」と刻んである。おそらくこの地城の名主階級の供養塔だつたのだろう。

県道に出て、更に西へ約五百米、そこは石打部落がある。部落入口の道側に、大永四年へ正三四年刻銘の六地藏塔、もと農協倉庫跡の空地に「石打のお塔」といわれる天正年間地藏塔があり、佐伯惟治、千代鶴父子にかゝる伝説が残っている。

二十一番札所延命庵は、石打部落の南丘上にある。本尊は虚空蔵菩薩と説かれているが、境域に延命地藏尊や地藏塔（六道地藏の名号を刻んでいる）があり、延命庵の名はこれぞと教えているようだ。ほかに宝篋印の二基があつたが、これも無住の庵であつた。

県道に出て府坂に向かう。途中下府坂の六地藏石幢を見て、二十一番靈場大川庵へ。現在の県道は突出した山を削り、旧大川庵のあたりを新道路にし、山端付近におつた史跡府坂三塚、庚申塔群の移転を余儀なくさせた。大川庵は府坂部落の西端、堅田川に近い広場に新設されている。この庵の本尊は薬師如来といふことになつてゐるが、案内してくれた清松氏の説明によると愛宕縣軍地藏とのこと。私は大川庵に伝わる大永四年伝子宗忠が刻んだという地藏菩薩像を見た。それは延命地藏尊によつた地藏尊、天冠を頂いた勝軍地藏ではない。この古仏地藏菩薩は大川庵裏の空地に祀つてあるが、それに隣して府坂三塚が移されてゐる。文禄三年高木越前守が堅田合戦の戦死者を弔つて建立したといふこの墓塔は、ふる里堅田の歴史と語る貴重な史跡である。

「これはこの世のことならず、死出の山路の裾野なる、寒の河原のものがたり、聞くにつけても哀れなり。二つや三つ四つ五つ、十もたらぬ幼子が、寒の河原に集りて、父恋し母恋し、恋し恋しと泣く声は、此の世の声とはことなり、悲しき骨身を透すなり。かの幼女子の所作として、河原の石を取り集め、これにて回向の塔を組む。三重組んで父のたか、二重組んで母のたか、三重組んで父のたか、二重組んで母のたか、兄弟おが身の回向として、紅葉のような手を合わせ、……」

これは寒の河原地蔵和讃、昔は勸進比丘尼などが哀婉な節まわしで謡い、七き兒の菩薩を弔つた。少年千代鶴の哀れを最期を伝える西野の原、そこは堅田川府坂の河原にたつたなり、さいの河原と俗称される。豊薩戦の合戦場であり、暴れ川堅田川の川敷である。このあたりは幾

(以下22ページ下段中ほどへつづく)

生徒諸子（鶴谷学館）を伴い、招魂所の桜花、夕陽に輝き居るを見て、往いて見物す。

同 四月三日

收ニと共に招魂場に散歩す。梅花の美しさを感ず。

(註) 独歩はたぶら招魂場に散策を試みています。

その昔、陸軍墓地は佐伯新氏の聖地でした。春季皇霊祭の日には参拜して、梅の下で「君が代」を斉唱し、秋季皇霊祭当日は日紅葉の下で「海行かば」の曲を合奏して、その英霊をたたえたりします。

同境内には敵愾の碑（陸軍大将一品大勲侯織仁親王顯朝、正六位數四年秋月新太郎換併書）と、東京警視隊戦死之碑（中村正直撰、大庭永成書）が建てられています。

○大分市

大分市牧の松栄山（県護国神社）は、大分新産都き一望に眺めることができる、すばらしい場所です。

その展望台のそばに、次のような説明板が掲げられています。（正面文字左の通り）

西南の役墓地

この墓地は、明治十年西南の役の際、竹田、三重、重岡、臼杵方面の戦鬪、ことに三回峠、旗返峠、黒土峠、梓峠、陸地峠等に於て戦死した大分、福岡、熊本、石川、鹿兒島、和歌山、長崎、愛知、島根、広島、兵庫、岐阜、三重、長野、大坂、茨城、滋賀、岡山、千葉、愛媛、東京、青森、福島、高知、秋田、山梨の二十七都府県出身の将兵二一四柱を埋葬してあります。

西南の役は、明治維新の諸矛盾と不逞武士の反抗とが重なった内戦であつたと云われていますが、新日本のおかげの故に、あたら犠牲となつた英魂に感謝しましう。

昭和四十六年仲冬

文 護 国 神 社 司
贈 大分中央ライオンズ・クラブ

同境内には東京警視隊萩原隊戦死之碑（佐伯招魂所の碑文と同じもの、明治十一年十月五日建）が建立されています。

また戦死した警部藤丸宗造、四等巡査土屋幸六郎、佐伯普士、准巡査岩崎共作をたたえた記念碑（毛利 撰書者 明治十二年十二月建）もありません。

(註) 藤丸宗造警部は五月二十三日竹田で、土屋幸六郎巡査は四月一日高野山で、佐伯普士巡査は五月十二日重岡で、岩崎共作は巡査は六月十四日高野山で、それぞれ壮烈な戦死を上げています。大分県内で、三等大警部萩原君貞配下の巡査は陸軍と戦つて戦死者五十人、負傷者百二十一人を出しました。いかにすさまじい戦いであつたかが推察されます。（おわり）

(ナニページよりつづく)

度か流路が愛り、地元民は水害に苦められた。

大川庵の西、竹藪の中は水島神社と刻んだ石祠がある。府坂の川の河童を祀つた祠らしいが、河岸の各所にある水神祠とも、水と農民の関連するものが左についている。波越、石打、府坂、西野、竹角、桐野、これら堅田川流域の各部落は、古来から地藏信仰が盛んだったようである。佐伯市内の他地域で見ることの出来ない六地藏塔（石幢）が数か所があり、寺庵には多く延命地藏を祀っている。

地藏祭祀、水神祠、水難——滞途にいた私は、どこかで関連している俗信仰の姿相を思い浮かべていた。

(この項終り)